

叢書

盲人たちの自叙伝

谷合 侑 監修
たにあい すすむ

全 60 巻

いま聞きたかったのは
人間のこんな
心の底からの声！

障害を持つ人 持たない人
すべての人びとを勇気づける
「迫真の人間ドラマ」

片寄った社会を揺り動かし
困難と闘い
希望を勝ちとった
「感動の記録」

失われたものの
数倍も大きく獲得できた
充実した人生のあかしに
満ちあふれるすがすがしい読後感！

発行 大空社

あかし
“生きる証”の一大叢書
自らのハンディを克服する以上に過酷なのは
社会の差別と偏見である。

叢書

盲人たちの自叙伝

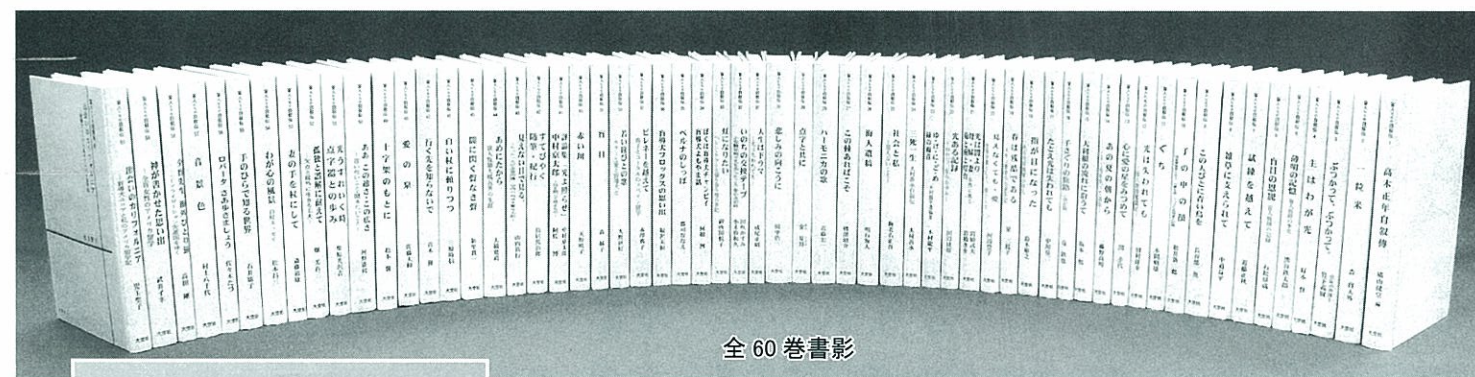
谷合 侑 監修
たにあい すすむ

全 60 巻

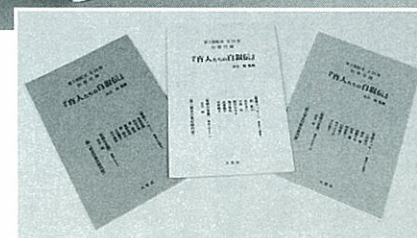
肉声で語られる闘いと叫びと感動の記録
いま耳を傾けたい珠玉の自叙伝！

- これだけ多く障害者自身の著作をまとめたものは他にありません。
- 入手困難な貴重な記録をまとめています。
- 日本の福祉、障害者と社会を考えるために必読の叢書です。

※本叢書は活字本です。点字本ではありません。



全 60 巻書影



■別冊付録■ 各期 1 冊
(四六判・並製・各 26 頁)
原著者書き下ろしエッセー
監修者の解説

【体裁】A5 判・上製・平均 250 頁 (1997-98 年刊行)

全 60 巻揃・定価(本体 342,858 円+税)

第 1 期(第 1～20 巻) 定価(本体 114,286 円+税)
第 2 期(第 21～40 巻) 定価(本体 114,286 円+税)
第 3 期(第 41～60 巻) 定価(本体 114,286 円+税)

公共図書館
大学・短大図書館

必備

■人物・伝記
■社会福祉・教育・歴史 のコーナーに
■ドキュメンタリー・随筆

学術図書出版
発行 大空社

〒114-0032 東京都北区中十条 4-3-2
TEL: 03-6454-3400
FAX: 03-6454-3433
URL: <http://www.ozorasha.co.jp>
E-mail: eigy@ozorasha.co.jp

紀伊國屋書店

叢書

盲人たちの自叙伝

全60巻

★先人の苦勞に学ぶ本当の障害者福祉★



第9巻・この人びとに青い鳥を より



第60巻・出会いのカリフォルニア より



第6巻・盲目の恩寵 より

失明という闇の世界から
涙と汗ではい上がり
自らの障害を越え
偏見と差別に立ち向かう

盲人福祉史上に残る
先覚者、開拓者、推進者――

この60巻は
そんな偉人たちだけの
自叙伝ではない。

日盲委 盲人に関する優良図書
推せん

三原時信著 白い杖に頼りつつ

著者の、三原さんは松山市出身で、早稲田大学在学中、眼疾単性緑内障に患ひ、将来失明の宣告をうけ、早大卒業とともに渡米して、邦字新聞「新世界」に入社、末には編集長まで榮進したが、予告通り白杖を頼る身となり、大東亜戦争を経て東洋文化社を興し、圖書の出版ならびに日本の書籍・雑誌美術工芸品の輸入など行なっているが、日本ではいわゆる三原式点字の發明者として識者間では知られている。また「ローマ字訳英和辞典」「模範日本語読本」「米國語訳本」「新式日本点字」、その他多数の著書があるが、いずれも日本人の心の橋渡しのものといわれている。また氏はいつも、日本人や東南アジア地区の盲人、あるいはその關係者がサンフランシスコを訪れると、自宅に招いたり市内観光の案内役をしたりして、こころ温まるようなしをされている。わが國の留學生も、いつも厄介になっている客である。昭和三十五年には四十年目に故國の土も踏んで懐しい思いでとっている。一方、氏は学生時代、内村鑑三氏の感化をうけて熱心なクリスチャンとなり、これを土台に自身の苦難な時代を切りぬけ、また、生活態度を決定している。

この本は聖書を中心に生活体験を、その、ときどきに語ったこと、書いたことを、一本にまとめたものである。ある意味では信仰生活の体験記であり、自伝であり、講演集である。おそらく盲人はもとより晴眼の読者はこれを読んで、光明を与えられ、こころの糧とすることができると信ずる。わたしは著者に数度となく、文通をしたことがあるが、その中にも、人をしてふるいたたせる何ものかがあったことを今さらながら思ひおこしている。（委員・長岡加藤治記）定価（二〇〇円・内地）六〇円・発行所・米國サンフランシスコ市サター街一七六五東洋文化社・発売所・大阪市北区堂島上三ノ二九大阪キリスト教書店

さまざまな職業の盲人たち――

国會議員 県會議員 市會議員
弁護士 学者 学校教員 留學生
牧師 伝道者 キリスト教信者
歌人 俳人 作家 画家
作曲家 歌手 箏曲家 女優
鍼灸師……

さまざまな環境の盲人たち――

生まれつきの障害
不慮の事故による障害
病を得ての障害……

男として女として
親として子として
共に生きる隣人として そして
ひとりの普通の人間として
精一杯生きた記録――

この60巻は

“盲人の鋭い目”を通して
見て、感じて、あぶり出された
現代日本の社会と人びとの“本質”である。

視覚障害



第21巻・菊と薊と灯台 より



第37巻・ピレネーを越えて より

盲導犬



第38巻・若い旅びとの歌 より

本叢書の「自叙伝」には、自分史、伝記、随筆、エッセイ、創作（詩歌集、小説）など、自身の生涯を語る広い意味の記録を含みます。

※本叢書は活字本です。
点字本ではありません。

監修にあたつて

谷合 侑

(視聴覚障害者支援総合センター・役員)

今回、大空社の英断と多大なご尽力によって、叢書「盲人たちの自叙伝」が刊行できる運びとなった。埋もれていた数多くの自叙伝が、広く世に紹介され、国民共有の文化財となり、障害者福祉の指針にもなることが期待され、喜びに耐えない。

この叢書は偉人たちの伝記ではない。盲人自身が書いた自叙伝である。盲人先覚者といわれる人もいれば、そうでない人もいる。これらの人々に共通していることは、失明という闇の世界に突き落とされ、そこから涙と汗ではい上がり、努力に努力を重ねて再起の道を歩み、そして愛と光を見いだしていく、という点である。闇から光へ、絶望から愛へ、波乱に満ちた半生を綴った、一人の人間の生々しい記録なのである。これら自叙伝の多くは、コツコツと一点ずつ点字を打って書かれたものである。この一点一点の中に、著者の吐息が叫びが、そして祈りが込められている。点字を打つ音を心の中で聞きながら、これらの著書を読むと、私たちはさらに大きな感動を与えられるであろう。

本叢書の選定基準には特別なものはない。幅広く、さまざまな分野で活躍している人を取り上げていきたいと思っている。

なお、収録書の中には小冊子の合本もあるし、伝記・小説も一部含まれることをご了承願いたい。

組見本(縮小)

④ 障害を受け入れる



「点字図書館へ行きませんか」と肩をたたかれ、日赤県支部が経営する神奈川県点字図書館で働き出してからもう一年以上になる。初めのうち障害者になり切れず、白い杖も持たず見えないうちに足るふりをして、人におつかつたり物におつかつてけがをしたり、いろいろつらい思いをした。自分は実際に見えないのだし、仕事だって視覚障害者にサービスすることなのだから、見えないのをかくす必要なんかないんだと、一応納得はするのだが白い杖は持とうとしなかった。始終、けがばかりしている私を見て職員たちも気の毒になつたらしく、身障者手帳をもらって白い杖を持つように勧めるのだった。

私は勤め始めてから三カ月ぐらいたったころようやくその気になって、福祉事務所へ出かけた。医師の診断書をつけて手続きをとってから、二カ月

第25巻・社会と私 より

一人ひとりの肉声から書き記された
愛と希望と勇気の記録だ！

● 推薦します

盲人福祉の強力なサポート

本間 一夫 (社会福祉法人日本点字図書館理事長)

もう十六年前のことになるが、一九八一年は「国際障害者年」という記念の年であった。日本の盲人福祉が一段と充実してきたのはその前後からであるが、盲人たちの筆が活発になり始めたのもそのころからだつたようにわたしは思う。それまでは、触覚や聴覚によって得たものを内に深く蓄積していたのだが、それを自らの主張として世に訴え始めたのである。

エッセイあり、随筆あり、歌集、句集、自分史などさまざまであるが、最も閉ざされた日常を余儀なくされていたハンセン病の人々の文学活動には、特に力強いものがあつたように思われる。

しかし、それらの図書は、図書館や書店にばらばらに置かれるだけで、広く人の目に触れることは必ずしも多くはなかった。そこへこの大空社の特別企画である。

これを読む多くの人々が、盲人の心情や社会的立場を理解し、その福祉にかかわりたいと思う人も増えてくるのではないだろうか。この企画を評価し、感謝し、期待するものである。

盲人たちの魂の訴えを伝えたい

栗原 均

(社団法人日本図書館協会理事長)

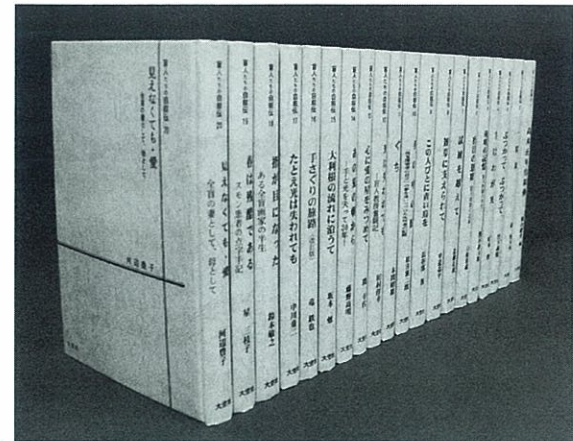
近代日本が生み出した、はなやかで夥しい出版文化とは異質の次元の、他に代え難い貴重な記録、資料群である。

視覚障害をもった人びとが、それぞれ自らの歩みをコツコツと点字に打ち、綴ってきた姿を想像する。そこには、著者の一人ひとりが、これまでに出会ったさまざまな苦難と絶望、堪えてきた社会的差別にもかかわらず、これらを克服したいまの「生きる証」を誇りを秘めて訴えかけようとしている。読者が深い淵に向って佇み、何故、どのように生きるかに思いを廻らせようとするときには、盲人の著者の言葉に大きな光と勇気ある励ましの愛を読みとることができる。

谷合侑氏著『盲人の歴史』が契機となつて企画・刊行される大空社の叢書『盲人たちの自叙伝』の今日的意義は大きい。その多くは入手困難であつたり、既に絶版となつた出版物を複製によって集大成するという。

図書館事業は生涯学習社会の伸展のなかで、地域や教育の場で資料と情報を求める人びとに積極的に提供することが求められている。このためには多様で豊かな資料が不可欠である。社会福祉の充実が叫ばれ、社会的なノーマライゼーションへの理解が一層深められようとしている今日、本叢書の一冊一冊は貴重な図書館資料群の一角を占めるに違いない。

雄々しく、清らかな魂の叫び！ その言葉に素直に耳を傾ければ
感動とともに、生きる意味が見いだされる。



(第1～20巻書影)

〈第1期収録の人々・内容〉

盲人の父 先覚者 社会福祉
点字図書館 点字聖書
司法試験 薬害 授産施設
奨学金制度 信仰 戦争
邦楽 歌 日記 家族

叢書

盲人たちの自叙伝

第1期配本 (第1～20巻) 収録書

※本叢書は活字本です。点字本ではありません。

第1巻 高木正年自叙傳

横山健堂編

我が国初めての盲人代議士。彼は明治29年41歳の時失明するが、その後盲人の衆議院議員として30数年、帝国議會で令名をはせる。言論彈圧への果敢な抵抗、普選法施行への信念には、晴眼者さえ及ばない力強さと強靱な意志力に読む者は胸を打たれる。

第2巻 一粒米

森盲天外

明治23年、27歳の若さで県會議員となった森盲天外こと、森恒太郎は、32歳で眼疾により失明した。苦悩・煩悶の末生命を絶とうと、死に直面する。その時、たまたま食膳に向かい箸からこぼれ落ちた一粒の米を拾い、その一粒の米の重さに生命の尊厳を知る。盲人村長として再起し、村政の改革に取り組んだ。その生きざまが伝わってくる。

第3巻 ぶつかって、ぶつかって。

全盲の弁護士
竹下義樹

著者は日本で初めての盲人弁護士。外傷性網膜剥離のため、中学校3年生の時に失明した。以降高校、大学を卒業し、そして司法試験受験へと挑戦が続く。法務省に対して点字受験を認めさせる運動を起こし、盲人の弁護士への道を切り開いた著者の功績は、計り知れない。

第4巻 主はわが光

好本督

日本の盲人の先覚者の中でも最も偉大と言われる好本督。「汝隣人を愛せよ」の言葉そのままに、岩橋武夫、熊谷鉄太郎、秋元梅吉など、数多くの盲人の指導者を援助し、育てあげた。点字毎日設立、点字聖書の出版などの業績を残した、好本自身の言葉によつて語られる「盲人の父」の一生。付、伝記。

第5巻 薄明の記憶

盲人牧師の半生

熊谷鉄太郎

人間の可能性の中から盲人の人生を切り開く、この感覚こそが、身体障害者問題の発展的解決となる。この信念のもと、自身盲人であり「牧師」でもあった著者は、自己の未来・盲人の未来を、「自己の生涯」によつて実証しようとした。

第11巻 ぐち

本間昭雄

一本の注射が原因で失明ばかりか肢体不自由ともなった著者。心の支えとなった姉に、絶望という死の淵から救われ、盲老人ホームを創立し、盲老人の福祉に取り組む。わが国唯一の盲大学生奨学金貸与制度の創設という業績を残すまでの足跡を語る。キワニス社会公益賞、朝日社会福祉賞、吉川英治文化賞など数々の賞を受賞している。

第12巻 光は失われても

盲人教授奮闘記

田村洋幸

40歳の半ば、パーチエツト氏病で両眼を失明。「見えない」という、学者にとつて致命的なハンディを乗り越え、大学の教壇に復帰するまでを、赤裸々な体験とともに描く。

第13巻 心に愛の星をみつめて

関幸代

生後まもなく失明した著者は、戦後9歳で弟を背に満洲（中国東北部）から引きあげてきた。星を見たい！母を見たい！全盲のハンディを克服し、盲学校の教壇に立つまでの若い女教師の愛と魂の軌跡。

第14巻 あの夏の朝から 手と光を失つて30年

藤野高明

不発弾の暴発事故で、両眼を失明し両手首を失った。著者8歳の時である。全盲者であるばかりか、肢体不自由者ともなった著者が、自己をいかに見つめ、どのように闘い、どう克服し、教職の道を歩むようになったか。深く、熱く、静かにたぎる魂の記録である。一九七一年には、対政府交渉によつて、著者だけに限つて大学の点字受験が認められ、合格。その奮闘の姿は全国紙にもとりあげられた。

第15巻 大和根の流れに沿って

坂本勉

幼くして失明し、10歳の時上京して宮城道雄に師事する。箏曲などを修めるかたわら、東京盲学校に入学し作曲と音楽理論を学んだ。ヨーロッパ、アメリカの各国より招かれ、各地で演奏を行う。本書は邦楽界で名を成した一筆曲家の偽らざる心の記録である。

第6巻 盲目の恩寵 盲人牧師の記録

石松量蔵

生まれながら視力を持たなかった著者はキリスト教徒となり、自らの盲目を進んで受け入れて牧師の道を選ぶ。伝道を通じて出会った多くの人々とのエピソードや、福祉に関する具体的な記述、旅先での思い出などから伝わるのは、柔和で静かだが常にまっすぐに前を見つめる、強い人間の姿である。

第7巻 試験を越えて

近藤正秋

温かい家族に囲まれて育った、明るく、真つ直ぐな少年は、27歳の時、敵の銃弾を目に受けて失明する。盲学校教員をへて名古屋ライトハウスを創設。変わらぬ信念と剛毅さで、空き缶回収から金属加工工業を興し、盲人のみならず広く障害者に自立の道を開く。盲人のための授産施設の開拓者。

第8巻 雑草に支えられて

中道益平

20歳の半ばで網膜剥離のため失明した著者が、一本の雑草によつて生きる力を与えられ、身障者の更生・援護にその生涯を捧げるに至ったその半生を、時代背景を克明に描きながら語る。盲重複障害者のための授産施設「光道園」の創立者。一九六六年、社会福祉事業功勞によつて、藍綬褒章を授章している。

第9巻 この人びとに青い鳥を

長谷部薫

40歳の半ばで失明した著者が、自らの境遇に敢然と立ち向かい、愛盲運動の先頭に立つて盲人福祉施設「山梨ライトハウス」の創立、点字図書館の開設、山梨県盲人会の結成への経緯を、その激動の人生を織りまぜて語る。

第10巻 手の中の顔

松井新二郎

「視覚障害者の自立」の夢を追いつづけた失明者の記録
両眼の光を大戦で失い、当時の陸軍病院でのたび重なる手術にも拘らず、26歳で失明に至った。日本盲人職能開発センターを創設し、盲人の職業問題に力を注ぐ。ヘレン・ケラー賞、点字毎日文化賞、吉川英治文化賞など数多くの賞を授けられ、社会福祉に大きな功績を残す著者が綴った、「視覚障害者の自立」の夢を追いつづける失明者の記録である。

第16巻 手さぐりの旅路 (改訂版)

竜鉄也

作曲家でもあり歌手でもある著者。手術によつて回復していた視力を、不慮の事故で失い、全盲となる。失明・離婚・自殺未遂という逆境の中で、歌うことだけが生命を支えていたと語る著者が、美空ひばりとの出逢いなど、歌手生活10周年を顧みながら、その半生を語る。

第17巻 たとえ光は失われても

中川童二

盲目の作家。終戦直後41歳で失明した彼は、家族を抱えて、途方にくれた。盲学校を卒業後、治療院を開きながら、小説家の道を模索する。数多の困難を乗り越え、大佛次郎に認められるまでになる。全盲の作家が、いかにして作家としての地位を認められるまでになったか。その苦闘の過程を、作家の冷徹な「眼」で描ききる。

第18巻 指が眼になった

鈴木敏之

2歳の頃のはしかで左眼の視力を失った著者は、家族との愛情そして軋轢の中、絵画にその才能を発揮する。結核がもとでついに全盲となつてからは、飯田蛇笏に師事、認められるが、絵画への情熱は消えることがなかった。彼はどのように油絵を描いたのか、そして個展を開くまでに至ったのか？

第19巻 春は残酷である

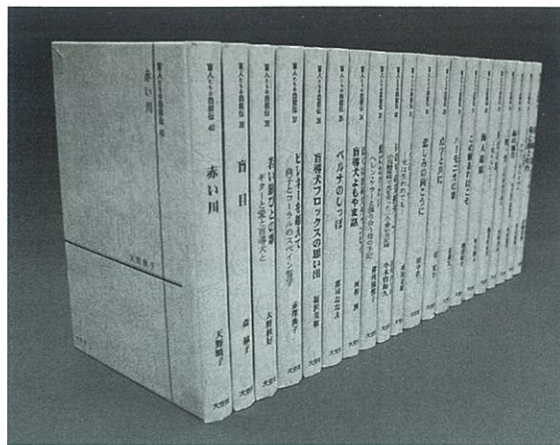
星三枝子

ある若い女性が、整腸剤を飲んだことが原因でその体の自由と視力を奪われる。スモン患者となった彼女は苦しみの中にありながらも薬害根絶のために、母や仲間とともに裁判を起こす。日記や書簡を通して語られる日常の小さな喜び、怒り、孤独から、薬害に毅然として立ち向かった一人の女性の姿が浮かびあがってくる。

第20巻 見えなくても・愛

河辺豊子

4歳の時、自転車事故で失明。昭和30年東京教育大学教育学部附属盲学校に入学。42年専攻科を卒業後、盲学校教師の河辺精孝氏と結婚、二児に恵まれた。全盲の妻として夫の長い闘病生活を支え、また二児の母として、その育児の苦闘を綴る、泣き笑いの記録である。



(第21～40巻書影)

〈第2期収録の人々・内容〉

日本ライハウス 点字楽譜
点字図書館 ハンセン病 女優
戦争 鍼灸治療楽 留学体験
交換テープ 出産 子育て
ヘレン・ケラー ギター 盲導犬

叢書

盲人たちの自叙伝

第2期配本 (第21～40巻) 収録書

※本叢書は活字本です。点字本ではありません。

第21巻

光は闇より／母・妹・妻 女性に與ふ
菊と薊と灯台

岩橋武夫
岩橋きを

第22巻

光ある記録 わが六〇年のあゆみ

田辺建雄

第23巻

ゆ・け・に・ど・め 木村龍平遺稿集
緑の雨音 木村龍平遺稿集

木村龍平

第24巻

三死一生 大村善永自叙伝

大村善永

第25巻

社会と私 見えないこと

海老名正吾

第31巻

人生はドラマ 光は失われても

成尾正昭

第32巻

いのちの交換テープ

小児糖尿病で光を失った二人・愛の全記録

田吹かすみ
小本曾和久

第33巻

虹になりたい

ヘレン・ケラーと張り合う母の手記

御所園悦子

第34巻

ぼくは盲導犬チャンピイ
盲導犬よもやま話

河相 冽

第35巻

ベルナのしっぽ

郡司ななえ

27歳で失明した犬嫌いの著者が、盲導犬とパートナーを組み、子育てをしていく決心をする。一緒に生活をしていくにつれ盲導犬ベルナと深い信頼関係を築いていき、出産・子育ての夢を実現させる。だが途中、ベルナの目が見えなくなってしまう。それでもそばにおいて、家族の一員として最後まで見守った、盲導犬と人間の愛の物語である。

第26巻

海人遺稿

明石海人

幸せな家庭生活の中、突然の発病。家族と離れ一人闘病生活を始める。しかし、原因不明の熱病により精神錯乱の状態に陥る。1年以上の昏迷状態が続いたのち、短歌や俳句などに取り組む。病気の進行により失明。さらに咽喉切開などの試練を乗り越えて、短詩文芸へ情熱を傾けた。

第27巻

この棘あればこそ

磯部昭介

ハンセン病に侵されて光を失った著者。戦前の療養所の悲惨なようすと、自殺を試みるまでの絶望と悲哀の極限から、キリストの救いに至るまでの記録と信仰の書。信仰によって神より与えられる力で生きる姿には、光や、明るさや、力強さを感じられる。

第28巻

ハーモニカの歌

近藤宏一

10数名のハンセン病による失明者達が、音楽好きという一点だけで結束した「あおとり楽団」。コンダクターである著者は唇で点字楽譜を読み、作曲もした。ハーモニカから光と愛と夢が生まれた。楽団誕生や演奏会でのエピソードの数々の記録である。あおとり楽団園外演奏年譜掲載。

第29巻

点字と共に

金 夏日

祖国から離れた土地日本で、ハンセン病を発病。失明の上、手指の運動麻痺とともに、第二の目である皮膚知覚も麻痺。その上他国の療養所での慣れない生活。死をも通り越した著者の血を流しながら綴った文字は、生き抜く執念の言葉となっている。

第30巻

悲しみの向こうに

田中浩三

25歳の時、ベーチェット病により失明。さらに難聴と右片麻痺が重なり障害者になった著者。言葉では言い尽くせないほどの悩みの日々の中で、キリスト教の信仰の世界に入る。喜びも苦しみも、すべて背後の主のなせるわざとして、より深く神の愛を認識する過程を夫婦愛を通して描く。

第36巻

盲導犬フロックスの思い出

福沢美和

盲導犬フロックスと著者が出会い、訓練所を卒業してから、数えきれないほどの旅行や講演会などに出席した。さまざまな出来事の中で心に残った事を新聞に投書するなど、本にして沢山の人たちに伝えてきた13年間を振り返り、共に歩み続けて来たフロックスへの感謝の気持ちとねぎらいの思いを込めた記録である。

第37巻

ピレネーを越えて

赤澤典子

あこがれの国「スペイン」に行きたい。そんな決心をし、さまざまな壁を乗り越え、念願の「スペイン留学」を盲導犬と共に実現した著者。友人とは別々の下宿先を決め、大学生活やスペイン盲人協会の人たちとの交流、さらに手芸教室やピアノレッスンなど次々にチャレンジを重ね、「この道を歩いてきてよかった」という著者の「スペイン留学体験記」である。

第38巻

若い旅びとの歌

大野秋好

21歳の時、網膜剥離により失明した著者。苦悩絶望の中から作曲と歌手活動をはじめ。そして全国の施設を巡回していた時、盲導犬ブランドと出会う。ギターと盲導犬とのさすらい行の中で、多くの人々の愛にふれていく。

第39巻

盲目

森 赫子

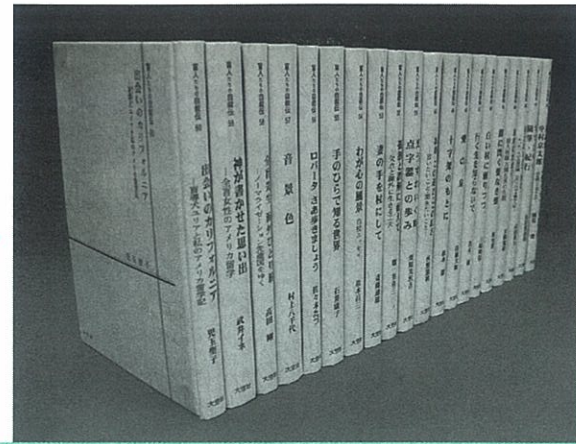
新派の女優として活躍した著者。42歳の時に眼病により失明、舞台から降りる。同年出版した『女優』がベストセラーになる。本作品は、従来の盲人像によらず、見えない者による等身大の盲人の姿を描きだそうとした意欲作。

第40巻

赤い川

天野暁子

「どこにでもいて、誰とも話しあえる、ごく普通の盲女性」を描いた自伝的小説。著者の分身である主人公真喜子の生きる姿は、障害者として、女としての特殊性から解放されて、人間全般の生き方を問う普遍性にまで昇華されている。



(第41～60巻書影)

〈第3期収録の人々・内容〉

エスペラント 点字新聞 点字器
議員 失明と晴眼 童話作家
軍隊生活 英語教師 アメリカ留学
キリスト教 盲学校校長 障害者教育
ノーマライゼーション 盲導犬

叢書

盲人たちの自叙伝

第3期配本 (第41～60巻) 収録書

※本叢書は活字本です。点字本ではありません。

第41巻

評論集「光よ照らせ」
中村京太郎 目を閉じて見るもの

中村京太郎
阿佐博

第42巻

すてびやく／随筆・紀行

鳥居篤治郎

日本の「盲人の父」といわれる著者は4歳で失明するも、生来の快活さを失うことなく成長。東京盲学校で学んだ後、一切無差別を唱道するバハイ教と世界共通語のエスペラント語に出会い、不動の信念を築いていく。「盲目は不自由なれど不幸にあらず」とうたいあげた鳥居哲学が本書に満ちている。

第43巻

見えない目で見る。

山内常行

たった一人の全盲市議 山内つねゆき奮せん記
全国で初めて全盲市議として再選を果たした著者の、再選を決めた選挙戦を中心としたドキュメント。著者も含めて「普通の市民」が選挙戦の中で繰り広げる試行錯誤と、政治への熱い思い。そして見えないことをちよつとした知恵と工夫で解決していく様子を、軽快なタッチでつづっている。

第44巻

あめにたから 盲人牧師大橋五男の生涯

大橋寛政

事故により右腕と両眼を失った著者は、12歳の時日曜学校に出席し、キリスト教への道に目覚める。本書は各地の教会での活動と京都における幅広い福祉活動が記述されている。また多くの人から寄せられた追想編から、著者の懐の深さを窺うことができる。

第45巻

闇に閃く聲なき聲

新里貫一

在米日本人として活躍していた著者は、人生半ばで突然眼病により失明する。闇からの救いとなったものはキリスト教であり、また一生涯つねに光でありつづけるものとなった。ロサンゼルス市の路傍伝道を14年間続けるなど、アメリカにおける幅広い伝道活動の回想録である。

第51巻

光うすれいく時

栗原光沢吉

明治の盲少年が教師になるまで
点字器との歩み

幼少期の思い出、盲学校での生活、盲学校教師としての生活などを綴った自伝。本書の底には障害者を持つ苦労の中で立派な社会人に育て上げてくれた両親への感謝の念が一貫して流れている。著者はまた生涯を通して点字器の改良に熱心であり、その足跡が後半の『点字器との歩み』に紹介されている。

第52巻

孤独と誤解に耐えて

畑美喜三

欠点と疎外に生きる工夫
軍隊生活の栄養失調と過労から失明した著者は、その後大学で心理学を専攻する。本書はカウンセラーとして働く著者の回想録であり、大学生活を中心に、自身の境遇から感じる思いと心理学的見地を融合させた独特なものの見方が展開されている。

第53巻

妻の手を杖にして

斎藤通雄

会社役員をしていた著者が、様々な形で盲人と出会う中で、盲人の心を晴眼者に訴えるために創作をしたという思いが募り、出版された一冊である。盲人として生きた半生に感じたことを、温かい言葉でまとめている。

第54巻

わが心の風景 白杖エッセイ

松本昌三

働き盛りの壮年期に中途失明した著者が、心に映るまににつづったエッセイ。生い立ちや現在の生活についての描写の豊かさもあることから、晴盲ふたつの世界を社会人として経験した著者の、障害者として意見を述べた文章は、広い視野に基づいており、強い説得力を感じさせる名文である。

第55巻

手のひらで知る世界

石井康子

小学校入学時に弱視だった著者は、8歳の時に聴力を失う。手のひらに文字を書いて人々と会話する著者が、子どもの頃のことから、はり・灸・マッサージ師として働くようになった現在の生活までの半生を、手のひらの中で広がる世界を中心に、鋭い視点と豊かな感性で描いている。

第46巻

白い杖に頼りつつ

三原時信

キリスト教への信仰の道を歩む著者は、日本でキリスト教、英文学を修めた後、父の在住するアメリカへ渡り、邦字新聞社で翻訳記者、後には編集長として活躍する。本書には白い杖を頼りにアメリカ各地を伝道する著者の歩みが記述されている。

第47巻

行く先を知らないで

青木優

大学附属病院でインターン生として働いているさなかに失明した著者は、失意の中でイエスの言葉により救われ、牧師になることを目指す。盲学校での生活、赴任した教会での活動を中心につづられた本書は、牧師としての半生の記録でもあり、また独自の障害論を展開している書でもある。

第48巻

愛の泉

佐藤大和

著者自身が「神の愛に生かされ導かれた」と語る半生の自伝である。日記、日々の様々な記録から編まれた本書からは、神への愛を根底に持ちつつ、盲人福祉を中心に活動的に取り組む著者の姿が、詳細に記録されている。

第49巻

十字架のもとに

松本馨

視覚障害と手足に感覚麻痺のある著者は、44歳の時パンフレット「小さな声」により宣教活動を始める。そのパンフレットに発表した文章の中から、柱とする「信仰と世俗」、「終末に向かつて」、「無教会」の三章に分類し収めたものが本書である。著者のキリスト者としての幅広い考えと、活動の足取りを感じさせる書である。

第50巻

ああ この速さ・この広さ

河野憲利

言いたいこと・聞きたいこと
小学校二年で失明した著者は、その後宮崎県立盲学校で全盲校長として名を馳せ、20年間活躍することになる。盲人の自立と人権を確立するため、行政と戦うと同時に、教育者として盲児の教育に心をくだいた。退職後も障害者教育や福祉についての発言を活発に行った。著者の盲教育者としての熱い思いと、的確な主張が聞こえてくる。

第56巻

ロバータ さあ歩きましよう 佐々木たづ

高校三年生の時に失明。その後童話作家としての道を選ぶ。「良い童話を書くために」と英国に渡り盲導犬ロバータを得る。前半は失明から童話作家になるまでの思いを率直につづり、後半は英国でのロバータとの訓練の様子、帰国後の生活などを描く。日本では盲導犬の訓練が始まったばかりの黎明期にあたり、盲導犬について広く世の中に紹介した書である。

第57巻

音景色

村上八千代

交通事故による突然の失明という衝撃から、生活訓練を受け、盲導犬イリアを得て、再出発の道を歩み始める。そしてカウンセラーになりたいという希望をもって、母校への編入学を果たすまでの日々がつづられている。中途失明をした女性の、見えない中で生きていくことへの心の揺れが伝わってくる。

第58巻

全盲先生 海外ひとり旅

高田剛

ノーマライゼーション先進国をゆく

全盲者として初の公立中学校の英語科教師となった著者は、教員生活を送るうちに、もう一度障害者問題を考え直したいと思い、単身スウェーデン、アメリカ、カナダへ研修留学をする。全盲者として、またノーマライゼーションを目指しつつづけた教師として、肌で感じたありのままの体験記であり、正確な調査に基づいた研究報告書でもある。

第59巻

神が書かせた思い出

武井イネ

全盲女性のアメリカ留学

横浜訓盲学院中等科在学中、15歳でアメリカのパーキンス盲学校に留学する。盲教育では世界的に有名であった同校での3年間の留学生活、そこで体験した盲教育の姿とアメリカでの日常生活などが、みずみずしい少女の感性で綴られている。

第60巻

出会いのカルフォルニア

児玉聖子

自由な一人歩きがしたいという思いから、大学卒業後に盲導犬ユリアを得る。図書館で働き、さらに専門的な知識を学びたいという希望で、ユリアとともにアメリカの大学に留学し図書館情報学を学ぶ。かの地で修士号を取得するまでの2年間の大学生活を中心につづる。アメリカでの生き生きとした生活とユリアとのあたたかい心の交流が伝わってくる。